

浄土

1979-9

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授受認許） 第三二五号
昭和五十四年八月二十五日印刷 昭和五十四年九月一日発行
第四十五卷 第九号



じっくり味わいたい

「たら」と「れば」

今回は、高校時代の友人夫妻のニューモラスなエピソードを紹介したい。

S君とは、ともに書道部に籍を置いた関係で、卒業後も交友は続いている。S君は二年後輩のTさんに一目惚れ。ほのかな愛情を大



事に育てあげ、大学を卒業して二年後、めでたくゴールイン。現在、二児のパパである。

このS君と、八年ぶりに再会した。保険会社に就職したS君は、札幌支店を皮切りに、金沢・神戸・名古屋の各支店を経て、今年の四月、東京の本店に課長代理として栄転してきたのだった。

早速、旧友に声をかけ、ささやかながら祝いの会を催した。会場は、もちろん朝鮮料理の店だった。S君がレバーを無類の好物としていたからである。

席上、S君は、

「友人の温情には泣けてくるよ」と、つぎのような話をされた。

「Tと結婚する前、嫌いなものは何と聞かれたので、『たらとれば』と答えたんだ。そうしたらどうだい、食事に一度もレバーが出てこないんだ。そこで、そのわけを聞くと、私

は嫌いな食物を聞いたのよ、ときたまんだ。完全な勘違いなんだね。私がいったのはそうではなく、『……してたら、』……してれば、と、やってしまった結果について、ああでもない、こうでもない、とよくよしている奴が嫌いだ、といったつもりだったんだが、おかげで、しばらくレバーはお預けになるし、つらかったですよ」

一同、大笑いとなり、同席された奥さんともども、いい肴となっていました。

このS君の生活心情ともいうべき話、その場では笑い声のなかに茶化された形となったが、なかなか深みのある話であった。

というのは、平生の行為を顧ると、あまりにも、この『たら、れば』的なことが多いからである。確かに、つぎになすべき行為、動作は、過去の反省のうえにあることが肝心である。しかし、愚痴にも似た『たら、れば』的反省では、まともな結果が出ないのは必定である。過信は禁物であるが、自信に満ちた行為が、素直にできるような日々を送りたいものである。

(長谷川宣丈)

九月号



念はすなわちこれ唱なり。

——『選本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.60)

目次

法 話

秋のお彼岸	藤野俊雄	…(2)
お念仏説法	小布施弘学	…(6)

私と宗教

一故・荒木萬寿夫先生の思い出	合島近	…(10)
善導大師と留学僧道昭	中井真孝	…(14)

〈連載〉

六時礼讃の「無常偈」に生きる(6)	安居香山	…(17)
善導大師の生涯とその教え(9)		
『観無量寿経』の実践者		…(20)

法然と道元

一仏教の根本原理とその庶民化	河野喜雄	…(30)
----------------	------	-------

〈随想〉

形あるものから形のないものへ	福嶋瑞江	…(24)
浄土句集	一田牛畝選	…(28)

〈表紙裏・巻頭言〉

じっくり味わいたいミたらミとミればミ	長谷川宣丈	
念仏ひじり三国志⑥——法然をめぐる人々	寺内大吉	…(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

法 話



秋のお彼岸

ふじの しゅん ゆう
藤野俊雄

(京都・銀閣寺町浄土院住職)

今年の気候は六月と七月が逆さになった様で、関東の方のお盆は涼しく過ぎましたが、関西はこれからお盆。その準備に入らねばならないのだが、梅雨明けがおくれた為に、むしろ暑くそのくせ炎天の猛暑が続くので、うだる様な気持で何もする気にならない。この様な時に、法然上人讃仰会よりの封書、何げなく封を切れば原稿用紙八枚半の依頼。月刊紙『浄土』は学者の先生や布教師の大家の様な方達が執筆されておるのに、なぜ私の様な門外漢の者の処へ依頼が来たのか理解が出来ないのでお断りしようと思ったが、ふと思いついたのに、檀信徒への施本用にする為マンガ本『地獄と極楽』を注文し、その中に別刷PR印刷を依頼していた。その縁がしからしむる処か、当方に檀信徒向けの随筆風に書けとの御下命の

様に思えるので、常日頃檀信徒の方々へと接しておる場における断片的な話を整理させて頂ける良い機会を与えて頂いたものと解し、厚顔無恥を省みず投稿することに致しました。

お彼岸の法話と言うことの様ですが、法話などと言う柄でもないで思いつくままに自由に書かせて頂きませう。

「秋のお彼岸」この言葉を聞くだけでも、何かさわやかな気分が致します。それは丁度暑い時に「つめたーい」と言う言葉を聞いた時の様に、好ましいものを求める気持ちにさせる様に致れた先徳方の智慧に感謝し喜ぶものであります。暑い夏から秋は自然にやって参ります。但し時間の経過は必要ですが、万人皆求めると求めざる

を問はず、必ずやって来ます。しかし、理想境の彼岸へ到ります為には、この暑いやな現実を放れたいと願ひ求めて念仏修行すれば、即理想境へ行けると言うのです。それはクーラーのスイッチを入れる様なもの、現実の、肉体の快楽とは違い、精神的、心の快楽を味う質的違いに於てでありましょう。そこから出発しますから、見た目の現実的には同じであっても、感覚的にことなります。受け取り方が違って参ります。暑い、いやな現実と同じでも、おおらかな気持で、夏だから暑いのは当たり前だ、暑さに打ちまかされることなく、がんばらなくっちゃ、と言う様に受け入れる気持になります。誠に御無礼なことながら、成道せられたお釈迦様も、難行苦行しておられた時と暁の明星の輝きと共に悟られたお釈迦様とは、質的に変化をなされました。それはどんなでしよう。心の眼が開かれました。仏の道を見付けられたのであります。さぞやすがすがしいお気持になられたことでありましょう。それは何によってでしようか？ 入正道と言う基調を見付けられたのであります。

八つの正しい道と言う、現実の生活の中に於て、それを乗り越える考え方に気付かれた訳であります。それはお

釈迦様だから出来た考えじゃなく、誰れにでも出来る考え方を見出されたのであります。そこに尊さを感じます。それはまず、この身、この世は、すべて苦であると言うことに気付くことであります。俗に四苦八苦と言う通り、四苦とは生老病死、生あるものは必ず死なねばならぬ運命にあり、悲しい淋しいことであります。その外愛し合いたいと思う者は会うことができず、厭うて離れたいと願う者にはつきまとわれる。

まして愛し合った者とは別れなければならない、盛者必滅会者定離の苦しみ多い世の中であります。この現実が気が付かなければ、そこを逃れたい、抜け出したいの気持は起らないのであります。

次に、この苦しみの原因は何なのか？ なぜ苦しみが起るのか？ それは惑(まどい)と前世からの業のしからしむる処であります。

五欲である。財欲・色欲・飲食欲・名譽欲・睡眠欲にとらわれ、迷わされるから道をふみはずすのであります。従って苦しみの寄つて来る処が、この五欲であることを認識しなければならぬのであります。

そうすれば、そこで、何としても、この五欲を断

ち、苦を離れ様と願ひ求めるならば、常楽の涅槃寂靜の境地が得られます。その理想郷に通ずる道が八正道である」と指し示されました。正見（正しい見方をする）、正思惟（正しい考え方をすること）、正語（正しい言葉を使うこと）、正業（正しい行いをする）、正命（正しい生活をする）、正精進（正しい努力をすること）、正念（正しい思いをつづけること）、正定（心静かに智慧を磨くこと）、これは日常生活の軌範となるものであります。

それでは八つの正しい道の「正しい」とは、どういうことを理解しておかないと、自分のものとはならないのであります。

現実には、私の方が正しいと思っている。相手の方も自分が正しいと思ひ込んでいる。為に意見が合はずケンカとなることが多い。一般社会に於ては、裁判にまで発展している例が非常に多い。何故だろうか？ 昔は童話に於てもバターンが決まっていた。必ず正直者に福が与えられ悪い人はひどいめに会う。善と悪とははっきりしていた。それが今は曖昧だ。どっちつかずで、どちらが善やら悪やら解らなくなってしまうている。それは法律の改正（悪？）によるものだが、敗戦によって日本の土

壌へ、アメリカの思想、マッカーサー師令によって何も彼も変えられてしまいました。日本人は輸入もののへの崇拜思想をもつ様になったり、家族制度を崩壊して核家族性へとあこがれ、一般的な生活機構までも変ってしまった。前学校教育法しかり、民主主義の美名を借りて権利の主張等々書き上げれば枚挙にいとまがないが、「何も彼も変ってしまった。百八十度考え方が変わってしまった」と言う言葉をよく耳にしたものであります。

最早や戦後も三十有余年。十年一昔なら、三つ昔と半端も過ぎようとしている。もう三百六十度の方向に向かつてても良いのではと思えるが仲々の様である。従って戦前派、戦中派、戦後派等考え方が根本的に違う人種が多くなったのだから、裁判問題も増えるわけです。そして自分の都合の良い判例を利用して有利に立回ろうとするのが多くなり、自分の方が悪いと思える様なのが平気でヘリクツをつけて利益を計ろうとする。五悪段さながらの相が現われています。

正しい「正」の字を辞典で調べようとすれば、「止」にある様に、正しいは一にとどまると書く。「まっすぐな」「かたよらない」「まじりつけない」「いつわりがな

い、つまりただすゝ悪事やあやまちをとめて改めさす
と言うことであります。

私が正しい、いや僕の方が正しいと思ひ込んでいるだけであつて（相手の立場に立つて見れば氣もつくのだが）、それが本当に正しければ、誰れが見ても、誰れが聞いても誰れが考えても、結論は一緒になるはずであります。だから一に止まるのであつて、本当に正しい事であるなら相手にあやまちを改めさせることができますのであります。

よく水を見るに、魚が見ると住居だと思ひ、人間が見れば飲み水に見え、天人が見れば瑠璃だと思ひ、人間が説話に使われるが、見る人の見方によつて、考え方によつて、「ゆがんだり」「いびつになつたり」する様に見えるのは自分の方に都合の良い様な見方をする為の錯覚であり、色メガネかけて見ている事を忘れてゐる為であります。明鏡止水と言う言葉がある様に心を鎮めて見れば、明らかな鏡にうつす様に本当の姿が見えて来るものであると、おさとしなされております。また善導大師の『四帖の疏』中に観法の処で、たらいの中に水を入れて眺めていると初めは良く見えないが次第に波が落ちついて来るに従つて、いびつに見えていた顔が徐々にはつき

り見える様になる。この落着いた心が観法できるのであると言う様に説いておられる。また法然上人は乱想の凡夫、思いがちに乱れ欲望と貪り、いかりとうらみの思ひの中にあつても、お念仏を称えておれば仏のお力によつて心が安らぎ、本当のものの姿を見ることができると念仏の功德を説いておられます。

この時候は、一年中で一番良い折であり、心さわやかになりやすい時であり、じつくりと、先徳方のお言葉を体験してみようではありませんか……。

原稿を書いている横で、一番下の小学校二年生の女の子が寝苦しいのか、寝られないで邪魔をしに来て、「体操をしても寝返りしても寝られない。どうしたら寝られるのね、お父さんたら……」「なむあみだぶ……と言つてごらん」「何回言うの……」「二、三十回でいいかな」「ナムアミダブ ナミナムダブ ナミナムダブ ナムアミダブ……」と十四、五回も言ったかな、最初、「言にくい、しんどいの」と言いながら知らぬ間に寝息をたてている。無邪気に、無心に、信頼しきつて……。私達もこの様に暮らしておれたらなあ、との思ひを新たにさせられ、寝顔をじつと見つめていた。



お念仏説法

おぶせこうがく
小布施弘学

(長野市長明寺住職)

○目は心の窓

仏教徒として行すべきつとめに、六度万行と申しまして、六通りの行が示されておりまして。その第一が布施行でございます。

布施行とは、世のため、人のために施しをすることでございます。お金や、品物ばかりが施しではございません。お釈迦様は「眼施」即ち、眼の施しをするように申されております。これは失明寸前の人のために、自分の死後、眼球をその人に役立てる「アイバンク」のことだけではございません。

これは慈しみの目を、外に向けることでございます。

昔の諺に「眼は口ほどのものを云う」、また「目は心の窓」と申します。

目をみれば、その人の心の中が分るものでございます。鏡に向って、恐ろしい目つきをいたしますと、鏡の中の顔も、この私を恐ろしい目でにらみつけます。この世の中の対人関係も、これと同様でございます。目つき一つで、相手に好感も与え、また嫌な感じも与えてしまいます。

人間の目は、見るものによって左右されますから、美しい涼やかな目つきにもなり、また、汚なく濁っても参ります。

み仏様のお慈悲のみ顔をみつめて、南無阿弥陀仏と称

えますと、おのづからこの私の心が、慈しみぶかくなつて、人様に向ける目が優しく輝やき、あなたの人柄を表わしてくれます。なごみのある生活をするために、お互に相手を責めることなく、許してやれる寛容さをお念仏で育てて頂きたいと存じます。

笑顔は最上のお化粧でございます。

○ 言霊の国 ことだま

皆さん、「声は肥なり」と申しまして、植木や野菜が肥料、こやしのかけ方によって、育ちもすれば、枯れもするように、私達の言葉も、使い方一つで相手を悲しませ、腹立たせ、また、勇気づけることになりました。俗謡に「丸い卵も切りようで四角、ものも云いようで角がたつ」とうたわれております。

私達日本のことを万葉集の中に「言霊のさきおう国」と申しておりますが、言葉には霊魂があつて不思議な力を持つておるのでございます。

声は私達の意志を表現するものでございますから、心の持ち方によって、言葉がおだやかにもなり、暴言にもなるのでございます。従いまして私達は、常日頃、心を

整えおさめて参らなければなりません。

それには朝夕、み仏を拜んでお念仏を申しますと、自然に人の悪口や愚痴不平を云わないようになるのでございます。どうせこの口に発する声ならば、相手をきづつけないようにして注意していくことが大切でございます。お互にかけ合う言葉が親切になれば、礼儀が正しくなり、うるほいのある社会が建設されるのでございます。み仏のみ名を称えるこの口を、言葉によって汚すことなく、常に美しくありたいと存じます。

○ めざめたる者

仏様の教えに「一切の衆生、悉く仏性あり」と申されておりますが、私達は人間として生れて来た以上、誰でも仏になる素質をもっております。

仏とは、覚者、即ちめざめたる者と訳します。私達は、いまこの目を開けておつても、迷い、煩悩に心がとざされておりましたは、真実明い世界に生きている人とは申せません。

他人の過失をいつまでも根にもつて、許すことの出来ない人は誠に哀れでございます。また、人前を飾って虚

栄心のつよい人は、世間で笑っておるのも知らずにいる
愚かな姿でございます。

おのれの業績を、人が認めてくれるのが待ち切れな
く、自分から自慢している人を見ると全く幼稚な人だ
と思います。

私達は、このような迷いの雲に、尊い仏性をかくされ
てはなりません。

私達はよく「迷っておりません」「正気です」と申し
ますが、み仏の前に静かに反省した時、いかに不平不
満、愚痴、疑い、妬み、忘恩に明け暮れて、迷いの道を
狂い歩いておることでしょうか。

これは明らかに、仏性がとざされている証拠でござい
ます。

南無とよぶ声に心の雲晴れて

さやかにみゆる弥陀の面影

ただひたすらにお念仏を称えておりますと、心にかかっ
ている煩惱の塵が払われて、その下に輝いている寶石の
ような仏性が、おのずから表われて参るのでございます。

○法の時雨

雨が降り始めました。静かな雨足です。

私は書斎の廊下に座って、六字の石庭のぬれていく様
を眺めております。見渡す限り、どこもかしこもぬれて
おりますのに、どうしたことでしょうか？ 少しもぬれず
に乾いているところがあるんです。

雨がそこだけ除いて降らないのでしょうか。そうでは
ございません。

雨は平等に降りそそいでおりますが、そこにはぬれる
ことを、遮っているものがあるからでした。

雪見灯籠の下や、大きな石の陰は、それらがまたげ
になって、ぬれることを拒んでおるのでございます。

み仏のお慈悲も、差別なく平等にお照らし下さってお
りますが、私の心にそれを遮るものがあっては、お救い
を頂くことが出来ません。

阿弥陀仏にへだつ心はなけれども

ふたする桶に月は宿らず

と、古人は詠っております。

宗教の世界に入るには信ずると云うことが最も大切で
ございます。私達の心に疑いと云う障害物があれば、み
仏のお慈悲をうけつけません。

み法を信じて念仏するところ、常にみ仏は私達の心を明るく、行い正しく、生活を和やかにして下さいます。殺伐とした今日の世情と物欲に走りがちな心の乾きをいやす道は、心に信仰の潤いをもつことが大切でございます。念仏はあなたを豊かな人に育てて下さいます。

○ 無常迅速

このほど私が懇意にしておりますお寺の住職が、夜更けの国道十九号で正面衝突の事故によって、哀れ二十八歳の若さで亡くなりました。

誠にいたましくも、恐ろしいことで唯々驚嘆いたしております。

お母さんと二人暮らしのこの住職は、親思いの優しい人柄で、信徒の帰依も篤く、誰からもほめられ愛されておりました。

私は早速、お悔みに伺いまして、ご回向のあと、お母さんにお会いいたしました。なんと申し上げてよいのか、全く途方にくれてしまいました。

夜半、東京からの帰りを、いまかいまかと待っておられたお母さんに、突如、「交通事故に会われたから、直

ぐくるように」との電話でした。お母さんは、傷の手当に布や紙を沢山用意して、心に

手はなくても足はなくとも見えずとも

せめて命を とどめ給え

と念じつ、二キロ程先の現場に、駆けつけましたが、既にこと切れて道のかたわらに遺体が安置されておったのでございます。

お母さんは、我が子にとり縋って、

「親思いのお前が、なんと親不孝な！」

と絶叫されました。

すると不思議なことではございませんか。既に屍になつた息子さんの閉された両眼から涙が溢れたそうでございます。

親子の真情は生死を超越して通じ合うものでございます。況んや仏教と私達凡夫の間におきまして、至心に念すれば、必ず通ずるものでございます。

中国の善導大師は「衆生仏を念すれば、仏も衆生を念じ給う」と申されました。

（筆者は長い間、闘病生活をされておりましたが、この程）
（全快されて、再び念仏実践と布教活動に入られました。）

私と宗教

— 故・荒木萬寿夫先生の想い出 —



合ごう島じま
近ちかし

(電気タイムス社長)

本誌の編集子から、私にも「何か書け」とおっしゃる。むろん、「ごかんべん」と謝った。私にしてみれば、光栄に感じるお申し出ではあるが、宗教に関する知識はからっきしだし、また、宗教とつながりのある格調高い話など書けっこないからである。

しかし、「予定がはずれて穴があく」と打ち明けられると、商売柄、その面の苦労がわかるだけに、つい同情心が湧く。で、故人の想い出話で「穴埋め」をさせていただくことにした。

これからご披露申し上げるのは、私の恩師故・荒木萬

寿夫先生に関する想い出である。

まだ憶えていてくださる方も多いと思う。例の池田低姿勢内閣の「高一点」といわれた荒木元文部大臣のことを。六年前の八月二十四日に急逝され、つい先日、郷里・大牟田でささやかな七回忌法要がとりおこなわれた。

荒木先生は、私の会社の初代社長として名前を貸してくださった。が、これは文字通りの看板貸し（無報酬）で、別段注文もなかったし、相談にも行かなかったの
で、この面での印象深い話はない。

私が魅せられたのは、常に態度は堂々としていて、そ

のくせ情にはもろく、表現はすこぶるユーモラスだったことである。そして、そうした荒木先生の言動に接しているうち、私にも、なんだか私なり宗教みたいなものが感じられてきたように思えるのである。

人間の目的とは、いったい何だろう？いつ頃からか、こんなふうに考えてみたり、人に聞いてみたりするようになった。何かをつくることでもなければ、どこかへ行くことでもない。結局「幸せに生きること」これしかないさそうだ。幸せに生きるには、心の満足がなければならぬ。心の満足を得るには、まず心にやましさのないことが絶対の要件だ。それに生活レベルに不満たらたではかなわぬ。そして、人様に愛されることが大切だ。

むろん、これは私にとって、こうありたいと思う願望に過ぎないが、これを荒木先生に当てはめると、まさにぴったりなのである。通俗的にみれば、ご苦労な人生だったというべきだろうが、私は真の「幸せ人間」だったといいたい。そして、自分もそうありたいと願う気持ち、一つの宗教だと思うのである。

新聞にたたかれようが、ときに身边が危険だといわれてもへっちゃらだった。いつでも堂々として、しかも愉

快そうである。心にやましさのないことが、幸せの基本だという実にすばらしい見本だった。

まだ若い頃、誰かに「心臓が強い」といわれたことがあるそうだ。そのとき、先生は「自分は心臓は弱い人間だから、いつも何が正義であるかということを考えている。自分のやっていることが正しいと思えば、匹夫といえども強からざるを得ないじゃないか」と答えられたそうである。

生活環境に対する気もち方も実に立派だったと思う。落選されてみじめな生活を送っておられたときでも、ぐちゃらしいことはもらさず、態度も変らなかつた。私がお邪魔したとき、ふんどし一つで草をむしっておられたが、「ま、だいぶしびれは切れるけどね」と苦笑された。地下鉄の長い階段を登り下りして、事務所へ通っておられたのも憶えている。高鼻をめぐらしたある人の豪邸をみて、「ほ、まるで刑務所みたいだ」ともらされたのも愉快な思い出である。金銭的なものに対する考え方がうかがえよう。

「しょんべんから血が出るまで頑張ってみたのか」。これは何か相談にきた人への、一つのきまり文句だった。

それだけきびしい訓話の裏で、チャーッと温情ある配慮をしてくださるのである。とにかく、じかに接した人がきまってほれ込んでしまう人柄だった。

学生のころの私がうならされた話にこんながある。奥様を看病されたときの話だ。たまたま看護婦になりた、という女子学生がいっしょだったため、先生は「手術はうまく済みました。しかし患者は死にました、では困る」という話から、じゅんじゅんと語ってくださったのが、次の体験談である。

「うちの家内も、いまじや一人前の顔をしとるが、実は死にそこなったんだ。肺病でね。そのときの医者やすることといったら、熱があるから湯をのませる。そうすると汗が出る。着替えさせる。それをくり返す。風呂はだめだという。できるだけ栄養のあるものを食べて、なるべく眠れといっても、食欲はないし、眠れるもんじやない。だんだん衰弱していく。

そのうち、医者から、あとひと月ぐらいしかもたない、といわれた。そこで腹をすえたんだ。もう医者のいうことばかり聞いてちゃだめだとね。まず家内に打ち明け、あとは自分の方法でいくことにした。

家内が最も望んだのは風呂なんだ。しかしそのとき、そんなことしたらいちころだ。よし、そんなら、もっとはその代りになるだろうと、手ぬぐい（最初は乾いたもので、両腕を逆さにこすって垢を落してやった。そして、ほんによか気持ち、という。その次は両足、その次は両腕、両足。なに熱は上がったってかまやせん。次は体半分、体全部、マタグラまで。しまいいは、一日に二回づつやってやった。

そして、皮膚の呼吸ができて気持ちいいのと、適当に疲れるのとで、だいぶ眠れるようになった。そして眼が覚めると、何か食べてみたい、という。骨と野菜による特製のスープを毎日運んだよ。

そうしているうちにひと月がたった。医者がきて、首をひねりながら、もうしばらくもつかも知れない、という。そのうち熱も下がり食欲も出て、いまのようになっただ。医者は、奇蹟だっというけどね。」

戦前の肺病といえは死病である。まさに心が治したといえないだろうか。

日教組攻撃に関しては、その言行録がだいぶ普及しているの、多くを語る必要はなからう。ただ、当時、池

田総理や閣議で逐一報告しなかったのは、責任を分散させたくないという気持ちからで、いつも辞表を用意して「日教組はバカなことをするからバカだ」というのだ。それがなぜ悪い」といった調子のキャンペーンを展開しておられた。

こんな話もある。「この頃はハト派とかタカ派とかよくいわれるが、僕はワシ派といわれている。ところで、僕の見るところでは、もう一つカメ派というのがある。差し当り大学の先生の相当部分はこのカメ派のようだ。甲羅で身を包んで、手足と首を縮め、ときどき首を出しては、学生の顔色をみて、また引っ込める。まさしくカメ派ですなあ」というぐあいである。

一部のボスに牛耳られたかたちになっていた文部省関係の審議会を、敢然と改められたのも、荒木先生ならではと思う。

私自身のことでは、こんなことがあった。

私が社会人となってまもなく、刺し違えてもいいくらい憎しみを覚える人間に遭遇した。ところが、思わず涙しながら訴える私に、荒木先生の言葉は、まことにあっけなく、しかし強烈だった。「なんだ合島、君はもす

こし見込みのある男と思っとったんだが、それじゃ、その男と同等だな」「――」まさにギヤフンである。

対人関係に限らず、いまでも気が滅入るような問題にぶつかることがある。そんなとき、先生の言葉を憶い出すのである。そうすればなんとか道がみつかるような気がする。

荒木先生は、浄泉寺というお寺さんのお生れで、子供のときから、よくお父さんやお兄さんの代りに檀家参りをし、お経を上げておられたそうである。アルバイトでためたバラ銭を中学の授業料に持っていったという話も残っている。

そんな生い立ちのせいだろうか。とにかく私にはとてつもない非凡な心の持主だったと思う。

ただ、欠点といえば、ご自分の健康に関し、自信過剰だったことだろう。もう少し用心してもらえば、あんなことにはならなかったかも知れない。

でも、私は、故人となられたこれからも、幸せになる方法をたくさん教わり、自分なりの宗教を充実させていきたいと思う。

善導大師と留学僧道昭



なか
い しん
中 井 真 孝

(仏教大学助教授)

○ 私は最近、善導大師（六一三—六八二）著述のいわゆる五部九巻が、いつ、だれによって我国へもたらされたのであるか、に関心をもって少し研究を進めているが、本文はそのつたない私考の一部を紹介して、御批判をあおぎたい（詳しくは藤堂恭俊編『善導大師研究』に寄稿）。

○ 正倉院に保存する官営写経所の文書を精査して、奈良朝当時の經典伝来の状況を研究されたのは石田茂作氏で

あるが、石田氏よりも先に、高瀬承敏・藤原猶雪の両氏は、正倉院文書のなかに善導大師の著述として、『観念法門』をのぞく四部の著述名が見えることを指摘している。すなわち、善導大師の著述である『観経疏』『往生礼讃』『般舟讃』および『法事讃』は、奈良時代にはすでに我国へ伝来し、写経所で書写されていたという事実を正倉院文書から検出できるのである。そして右四部の著述は天平七年（七三五）、玄昉が請来したと推測されている。この学説は今日なおも学問的生命をたもっているが、再考の余地は若干あると思われる。

書誌学の立場からいうと、『観経疏』は、現行と同じ

四卷合本のほかに、「観經玄義分」一卷（復數卷か）、「観經序分義」四卷、「観經正宗分」四卷、の三分別本のものであったことは、当時の写本が現存しないので断定はつしまねばならないが、古文書に徴するかぎり認めざるをえない。つぎに、正倉院文書に「西方法事讃文」の名で見えるのは、善導大師の『法事讃』の異称であるというが、写経に要した紙数から推すと、「西方法事讃文」は著者不詳にして、善導大師の『法事讃』とは別ものであると考えられる。したがって善導大師の著述のうち、『法事讃』もまた奈良時代に我国へ伝来していた確証は遺憾なからないのである。

正倉院文書の検索によって、官営写経所で書写された經疏中に、善導大師の著述は『観經疏』『往生礼讃』『般舟讃』の三部があり、奈良朝当時の我国へ伝来していたことは明らかな事実であるが、それではこの三部をだれが請来したのであるうか。私は入唐留学僧の道昭であろうと憶測するのである。

道昭は文武四年（七〇〇）に七十二歳で物化したが、かれの伝記は『続日本紀』にくわしい。これによると、白雉四年（六五三）遣唐使にしたがって入唐。かの地で玄奘

三蔵について受業、とくに三蔵から愛されて同房に住まわされ、帰国の際には三蔵所持の舍利・經論をさずかっている。帰国の年次は、遣唐使とともに帰朝したというから、斉明七年（六六一）のことであろう。後に元興寺の東南隅に禪院を建てて住み、天下の僧徒に禪を教え、また各地を周遊して、路傍に井をほり、津の渡りに船をもうけ、橋をかけた。物化後はその遺言により火葬に付されたが、「天下の火葬はこれより始まれり」と伝記は特筆している。さらに、平城遷都のとき、道昭の弟子らは元興寺内の禪院を平城の右京に移し、禪院寺として独立させたが、この禪院寺には多くの經論を有し、「書迹楷好にして錯誤せず、みな和上（道昭）の将来する所のものなり」とも付記している。

天平八年（七三六）、光明皇后の発願ではじまった一切經の書写には、当時の我国で入手が可能なあらゆる經論章疏を諸寺に求め、写経用テキストの確保につとめたのであるが、写経所は、文字の誤りが少なく、テキストとして權威の高かった禪院寺所蔵の經典を借り出している。正倉院文書にはこの禪院寺から借りた經典リストがのっており、禪院寺の藏書名がある程度は判明しているの

である。禪院寺の蔵書のなかには聖徳太子撰の『勝鬘經疏』がふくまれているため、一部には他所よりの混入したのもあったかも知れないが、大部分は道昭が唐より請来した經典であろうと推考される。

禪院寺の道昭コレクシヨンのなかに、「觀經正宗分定善義」「往生礼讃文」「依觀經等明般舟三昧往生讚經」なる書名を見い出すとき、私は、善導大師の著述である『觀經疏』『往生礼讃』『般舟讚』の三部は道昭が我国へもちつたえたという結論にたどりつかざるをえないのである。この結論が一応妥当と認められるなら、それは第一に、道昭の帰国が斉明七年(六六二)で、善導大師の遷化が永隆二年(六八二)であるから、善導大師の生存中に著述三部が我国へもたらされたこと、第二に、善導大師はこれらの著述を龍朔元年(六六二)以前に撰しおえていたことを意味するのである。

松本文三郎氏の研究によると、善導大師は、顯慶元年(六五五)より咸亨三年(六七二)にいたる間、長安の實際寺に住し、時には光明寺で説法したという。一方、道昭は在唐中、大慈恩寺訳経院や玉華宮にて訳経事業にはげんでいた玄奘に師事し、その寵愛をうけて同房に住まわ

しめられた。つまり、道昭の長安滞在の後半期には、善導大師も長安にあって浄土教を宣布していたのであるから、道昭は善導大師と会ったかも知れないのである。というのは、玄奘は顯慶三年(六五八)に新しく成った西明寺に勅命で住し、道昭もそれに従って移ったとすれば、西明寺と道一本へだてていたのが光明寺(後に大雲經寺と改称)なのである。あるいは光明寺における善導大師の説教をきき、柳樹より投身自殺した人の話を、道昭は耳にはさんだとも考えられる。

ともあれ、道昭のコレクシヨンには『觀無量壽經』・『阿彌陀經』のほか、道綽の『安樂集』があり、初唐に盛行した道綽・善導流の浄土教に道昭が関心をいだき、浄土教典籍を蒐集して我国へもたらしたのである。善導大師の著述が逸早く、しかも直接に伝来したとはいえず、それらは禪院寺の道昭コレクシヨンとして秘藏され、天平の写経のテキストとして官營写経所に借り出されるにとどまり、善導大師の浄土教思想の研究に資せられることはなかったのである。

■六時礼讃の「無常偈」に生きる■

——六——

—後夜無常偈—

やす
い
こう
ざん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

○

夜は、何故か人生を深く考えさせるものです。一人静かに机に向っている時、或いは床に臥して眠りに就こうとするとき、一日のあわただしい喧噪から離れて、物思いに沈みうるときです。

後夜はまさに真夜中です。万物が静かに眠りにつき、夜空には、唯星のみがまたたきます。そして、今この原稿を書いている時にも、夏の夜とは言え、立秋も過ぎたせいか、虫の声さえ何処からか聞えてきます。

こうした寂静の中であって、万物がすべて静止しているかのようではありますが、決してそうではありません。

虫の声が増えてくるではありませんか。それは生けるものの静かな動きであり、生命の躍動であり、更には、無常なるものの転移の相であります。何億年前から輝いている星の光も、長い歴史の中で輝き続け、そして、変化し、何時かは消滅することもあるのでしょうか。まさに諸行は、無常なのであります。

「後夜無常偈」に至りつくと、こうした感懷が、一層深くなってくるように思われます。そして、善導大師も、また「後夜無常偈」において、層一層、人生の無常を、別な形で表現されます。いつもの例にならって、これを掲げることといたします。

時光遷流転 時光遷って流転し

忽至五更初 忽ち五更の初に至る

無常念念至 無常念念に至り

恒興死王居 恒に死王とともに居す

勸諸行道衆 諸の行道のものを勸む

勤修至無余 勤修して無余に至りたまえ

この詩句は、前の「中夜無常偈」と違い、再び善導大師らしい詩形をととのえています。即ち、最後の二句にそれがあらわれています。そのことは、後にまたふれることとして、前四句について言えば、今までの「無常偈」の詩句は、何か前例があるか、或いは經典の内容の引用だとかあったのですが、これに関しては、それらしいものがはっきりしないのが特色です。或いは、大師自からが作りになったものかも知れません。もしそうであるならば、大師のご精神が、まともにあらわれたものということになりますが、先ずその内容を、大木惲夫氏の訳から、見てみることにいたしましょう。

時はうつりて 流転して

たちまち後夜に至るなり、

無常なること念念に

死の魔王をぞ伴える、

道を行する者に告ぐ、
勤め修めて悟れかし。

前の四句について言えば、大師なりの無常觀の説明と一向に変わりはありません。しかし、「中夜無常偈」においては、「臭屍を抱いて臥する」といい、ここでは、「死の魔王とともに居る」といって、その表現はまことに直接的で、何か身の毛のよだつようなぞろ恐ろしさを感じます。大師の表現は、ますます辛辣になるようです。私は、こうした表現は、大師がいつまでもめざめぬ凡夫のために、できるだけ強烈に無常を印象づけるためにとられた、表現法であると、有り難く拝読いたします。

いつも申しますように、人生は確かに無常であり、死の魔王の前に、刻一刻と近づいているにもかかわらず、われわれは、ついそうした現実を忘れがちです。そしてこうした事実を、風前の灯といい、日中の花にたとえてみても、他人事のように、見通しがちです。こうしたことへの強烈な指摘が、臭屍となり、死王となっているのではないでしうか。

最近私は、極めて親しい、私の親とも尊敬する人が、病床に苦吟されるのに直面しています。しかも、この方

は最早や死を宣告されたも同然なのであります。己に高齡とは言え、年はこの場合、問題外であります。しかし、今日の医学は、その事実を知りつつも、これをどうする力も持っていない。まして、私のごときものとしては、何の施しようもないわけです。

私の為しうることは、ただ病床に見舞い、これを元気づける以外にありません。眼前に人生の無常を見ると、ただあわてふためくだけであります。大声で、助けてくれと叫びたくります。しかしその方は、己に何事も知ったように、極めて静かであり、心に何かを念じておられるようであります。語るにも語れず、ただ私は、安らかにあれと如来様に念ずるのみであります。

こうした現実と直面すると、本当に、善導大師のお言葉が、わがこととして、直接的に理解されます。そしてこの現実、決して他人事ではなく、わが身にふりかかる現実そのものであることが、痛いほど感ぜられます。さて善導大師は、前四句で、こうした現実を、赤裸々に表現された後、ここで改めてわれわれに、訓戒されるのであります。それが、最後の二句であります。

ここで大師は、大師独特の口調で、「もろもろの行動

衆」たちよと、呼びかけられます。われわれに対する呼びかけであります。漢詩としての表現は、何か物静かな呼びかけのようではありますが、前四句の直接的な表現からすれば、これも決して、なまぬるい呼びかけではないのであります。「おまえ達よ、しっかりやりなさい」と強くさとされたものであります。

そして、「勤修」すること、即ち、つとめはげめとさとされます。それは、前の「自策自動求常住」といわれた「日没無常偈」のおことばと、同じ響きを持っています。ここにいう「無余」とは、また「無余涅槃」といわれるもので、あらゆる迷いを断ち切った寂靜の境地であり「常住」の世界であります。大木氏が、「悟れかし」と訳されたのも、こうした境地を取ったの訳であります。

こうした境地への到達は、われわれ凡夫にとっては、決して易しいことではありません。いや、極めて至難な業であります。それ故にこそ、法然上人は、み仏の力を頼んで、念仏を申せとすすめられたのであります。しかし、われわれが、無常な事実にめざめ、私なりに真剣に人生を考え、生き抜くならば、一歩でもこうした境地に至りつくものと、心がけております。

■善導大師の生涯とその教え■

— 九 —

◇ ◇ 『観無量寿経』の実践者 ◇ ◇

○
善導大師の思想なり信仰については、大師自身の著作を通してうかがうことが何より大切であります。大師はご自身の深く信じられた念仏信仰の道を人に伝えるために心血を注がれました。求道生活から教化活動へ、そして著作を通して、如来さまに直参して、如来さまの信心と救いの不思議さを人々に示されたのであります。

善導大師の著作の主なもの、一般に「五部九巻」といわれています。すなわち、一、『観経疏』四巻、二、『往生礼讃』一卷、三、『法事讃』二巻、四、『般舟讃』一卷、五、『観念法門』一卷であります。

『観経の疏』はいうまでもなく『観経』の文を解釈して浄土信仰の教理面を述べ、その安心についてことごとく

明かにしています。それに対してほかの四部は、実践的方面を説き、いわゆる起行作業について述べています。とくに『観経疏』は、『観経』の単なる文義解釈というのではなく、大師がいのちをかけて求めた結果開かれた浄土の法門を明示されたところのもっとも重要な聖典であります。このことについて、法然上人はつぎのように言っておられます。

「静かにおもんみれば善導の観経疏は、これ西方の指南、行者の目足なり。しかればすなわち西方の行人、かならず珍敬すべきものなり。なかんづく毎夜夢中に僧ありて、玄義を指授す。僧はおそらくはこれ弥陀の応現ならん。しかれば謂うべしこの疏はこれ、弥陀の伝説なりと。いかにいわんや、大唐あいつたえていわく、善導とこれ弥陀の化身なりと。この文はこれ弥陀

の直説なりと」

これは『選択集』の末尾に記されている文ですが、法然上人は『観經の疏』こそ、われわれ凡夫が浄土に生まれることのできる唯一のご指南の書であり、念仏者たるものはこの疏をよりどころとすべきことを示されています。しかも善導大師こそ阿弥陀さまの化身であり、そのお説きになられた教えこそ如来さまの直説であるとおっしゃって、法然上人は大師に対し全身全霊のまことをもって帰依しておられます。

では、量りしれない仏教經典のなかから、この『観無量壽經』が善導大師の心をどうしてそんなに引きつけたのでしょうか。これについて、法然上人は三つの理由をあげておられます。すなわち、一には、伝えるところによると、大師が求道のために経蔵に入り、手にまかせて經を探られたとき、大師に与えられたのがこの『観經』であったから、二には、師匠の道緯禪師から授けられたのが『観經』であったから、三には、この『観經』を注釈するとき神秘的な宗教体験をえられた因縁があったから、などのことがらであります。『観經』については、大師以前にも古今の諸師がいろいろ解釈をしておられますが、

それらの浄土教に対する誤りを正し、『観經』の真実なすがたを正しく頭わす必要があったからでありましょうが、そこには『観經』実践の行者としての尊い念仏体験を通して、『観經』を説き明している大師の真摯なすがたがうかがわれます。



とくに『観經』中、大師の心を引きつけたものは、韋提希夫人と、下品下生の惡人往生とであったろうと思われれます。この二人がもっともよく浄土教の特色をあらわしていることは、すでに多くの祖師も目をつけておられますが、とくに大師は思いをここに秘められたようであります。ゆえにこの二人の入信した経路を知ることが、やがて善導大師が浄土を願ひ求め合掌されたすがたを知ることになり、そのことはわれわれが浄土への道をあゆむための手引きとなろうと思えます。いまその大筋をのべてみましょう。

そもそもこの『観經』が敬尊によって説かれたのは、人間として最高位にある国王と、その夫人の上にふりか

かつてきた人生の悲劇からはじまります。それは、舎衛国の国王ビンビサー王とイダイケ夫人との間には、たった一人の太子アジャセがおりました。世の荒波を知らないアジャセ太子が、野心家の釈尊の従弟にあたるダイバダッタにそそのかされたわけです。つねに釈尊の名声の高いのをねたましく思っていたところ、ある日大衆の前で釈尊に叱責をされ、一層恨みをふかしました。そのころかれは、アジャセ太子に近づいて、父王を殺して国王になることをそそのかすのでした。ダイバにあってたてられたアジャセは、遂に父王に対して反逆の心をもち、父王を牢獄へ幽閉してしまふのでした。つづいて母イダイケ夫人も獄屋につなぎ、餓^うによって殺そうと企てるのであります。産み育てた愛しいわが子に反逆され、殺害されようとしているわが身のすがたの業の深かさにおののくイダイケ夫人の心中は、いかばかりであったでしょうか。そのとき、信仰深いイダイケ夫人ははるかに釈尊を偲^{しの}び祈りをささげるのでした。求道の念熾烈な夫人のねがいに対して釈尊は王のために弟子のブルーナを、夫人のためにアーナンダをつれて親しく訪ね、夫人のためにとくに説き示された法門が、阿弥陀如来の救

済の教えでありました。その教えによって夫人はついに解脱することができたのであります。

いままさに死の巖頭に立って、生への深い執着を感じとった人間に、安心立命の境涯にいたらしめる法門が無量寿仏への帰命法門であります。

つぎに、下品下生の行者というのは、この人は生涯おそるべき五逆や十惡を犯し、あらゆる不善をなし、その極惡非道の報いは、死に当面してもだえ苦しみ、どうしても惡道に流転するより仕方がないわけです。その人がまさに惡道に墮ちようとする利那に、善知識の導かれるまま一声南無阿弥陀仏と唱えたのです。不思議にも死の苦しみが転じて往生のよろこびに満たされたという行者であります。

もとより善善大師は、持律堅固の聖者であって、一生涯惡いことばかりしている下品下生の人と同一視することはできませんが、しかし、大師自身は、煩惱具足の凡夫であるといわれています。宗教的善惡の標準から、自己を内省してみますと、わが身は知らず知らずに罪をつくっている罪惡人であるという意識が感じられてくるの

であります。

「人一日の中に八万四千の念あり、一々の念みな三途の業なり」

とは『仏名経』に説かれている言葉であります。自己の反省が深かければ深いほど、わが身のつたなきがしみじみと感じられるわけです。

大師が「自身は現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた六道に流転して出離の縁あることなし」と告白され、「煩惱深うして底なし、生死の海ほとりなし、苦を渡る船未だ立たず」と悲しまれ、慚愧懺悔の心情を吐露されたのは、人間の根源的な叫びといえます。

『観無量寿経』に説かれたイダイケ夫人の悲劇も、また下品下生の惡人のすがたも、それは人事ならぬわが身のすがたであり、そこに現実に生きる人間の生きざまということに気づかれたのが善導大師ということもできましょう。

風前の灯にも似た無常の身の上に永遠の生命が与えられたイダイケ夫人、またけがれにみつる罪惡の身に光明が与えられた下品下生人のすがたに合掌し、ひたすら念仏して如来のはかりしれない救済の深さに感動して生き

ぬいた大師こそは、まさに弥陀の化身と仰がれるにふさわしい人柄であられたわけであります。



この『観経の疏』を著わすために大師は、一心に弥陀、釈迦の二尊、観音、勢至の両菩薩をはじめあらゆる仏、菩薩の靈驗をおおぎ求め、『阿弥陀経』を誦すること三遍、阿弥陀仏を念ずること三万遍を誓われ、夢中に現象としてあらわれるよう、ひたすら発願されたわけです。

しかも、その願いがかなえられて、夢中に、種々の光明が地を照し、仏、菩薩のすがたをおがむことができ、大師は合掌し礼拝されて、夢からさめても歡喜が消え去ることがなかったのです。その感動により注釈書を書かれたわけですが、毎夜夢中に聖僧があらわれて指授されて、大師が『観経の疏』の執筆が完成すると、もはやあらわれなくなったといわれます。『観経疏』のおわりに書かれているこの靈瑞のことは、単なる夢ものがたりというのではなく、大師自身の畢竟の作として、ゆるがせにすることのできない絶対帰依の信仰感情の表白とつけとめることが大切であります。

(宮林昭彦)



〈随想〉

形あるものから形のないものへ

福嶋瑞江

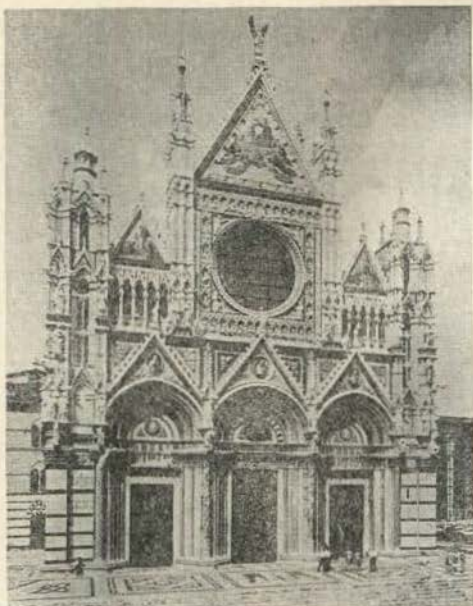
今から二昔前のことになろうか、私が初めて奈良を訪れた折、薬師寺のご本尊様を拝観して、その偉容に打たれた感激は今もって新たな息吹きとなって心に蘇ってくる。当時はまだ昨今ほど大勢の観光客を集めていなかったお寺では、寺男とでも称せられるハッピー姿の案内人が自慢の肉声を響かせていた。言葉巧みに客を飽かせずに語ってきかせるその説明の中に、私の耳にふっと止ったのは、この薬師如来の台座に鑄込まれたぶどう唐草が、インドからきた文様であるという一言だった。そして、私はこのぶどう唐草を模したブローチを記念に買って帰ったものだ。

それからまた一昔たって、私が初めてフランスを旅し

たときに、フランス中南部の都市、トゥールーズを訪問した。ここはバリ大学についてフランス第二に古いトゥールーズ大学を誇り、画家ロートレックゆかりの地として親しまれ、また近年はコンコルドの製作工場ができて工業都市としても活況を呈している都会である。短時間に手取り早くてすむ市の観光サービスのミニバスで市内見学をした。いろいろと廻った末に一番最後に博物館に連れてゆかれた。かつては修道院であった建物の古い廻廊に置かれた幾つもの石棺を見て歩くうちに、はたと思ふに当るものがあつた。司教の遺骸を納めたという石棺の一つに、まさしく私のブローチが、つまり薬師寺のぶどう唐草の文様が彫られていたからである。同行のフラン

ス人は、その源流はエジプトだと教えてくれた。そしてこのとき、美術史の門外漢である私も遅まきながら、世界の文化は、たとえ幾様に曲折をへても、その流れを辿ってゆけることを、この一つの唐草模様から実感したのであった。

だから、とかく「日本独特の」と言っても、また「西洋固有の」と言っても、やはりどこかに類似性や共通性が



—シエナの大聖堂—

認められるものがあるに違いない。これも、もう一つの例だが、日本の陶器の文様に氷梅というのがある。小さな五弁の梅の花を形どった円形を幾つも散らし、その間を稚拙とも言える線で結んで、さらにその間に点を埋めてある馴染み深いものだ。この氷梅に私はスペインで廻り会った。そのときは、私のヨーロッパ旅行もいくたびか回を重ねていたので、もう何かにつけて一々驚くことも然程なくなっていた。それが、スペインのカタロニヤ地方の小さな田舎町タラサに行ったときである。ここはバルセロナからローカル線に乗って約一時間、珍しい西ゴート族 (Visigothique) の教会が残っているの有名な町だ。その五世紀の建物の一つである洗礼堂の壁に古ぼけたフレスコ画が描かれているのだが、実は、これが氷梅とよく似た文様なのだ。よく似たと言うよりは、梅の花の部分が只の円だけで、後は全く同じなのだ。この二つのものが関連があるとは明言はできないが、しかし素人の目には、これこそ氷梅文様の原形と思え、奇異な感じよりも一種の懐しさをもって眺めたのを覚えている。

こうして洋の東西の美的表現、とくに視覚に訴える芸術作品には、その類似性のうなずけるものの多いことに

私は確信を抱くようになった。なかでも、フィレンツェの花の聖母マリアの大聖堂に附属する洗礼堂の天井を飾るモザイクの地獄図絵には、われわれ東洋人は微笑を誘うほどの奇妙な感情をもって、それを認めることになるのだ。

だが、だである。日本にあって西洋にないもの、その逆の西洋にあって日本にないものも存在して然るべきだろう。

私はこの一例を、中部イタリアのシエナの大聖堂で見た。元来、日本では宗教的な美術品とは、坐して観賞するものであり、自分の前にあって、やや目線より高く、幾分顔を仰向けて見るものではないのか。もちろん大仏さまは立っても拝むし、絵巻物は俯向いても見るだろう。しかしこのシエナの大聖堂の芸術品は、立ってその上を歩くのである。日本では散策するための庭すら、枯山水と称して、坐して観照し、かつ観賞するものとしたのだ。

フィレンツェから車で約一時間、中世からの伝統を誇るこの古都には、緑と白（厳密に言えば象牙色）の大理石のだんだら模様（ピラ）の柱をもつゴシック様式の大聖堂が建て

られている。ミラノの白大理石の大聖堂が夕陽に映える景観に讃嘆を惜しまない人々の中には、そのやや悪趣味とも言える装飾性に嫌悪感を催す人もいる。しかし、その俗っぽさというより一種独特な自然の大理石の怪しい色調の中に、さらに異様な雰囲気を増長するのは、堂内の床面の装飾である。ペーヴメントと称するのは、モザイク舗装は、広い本堂内に幾つものイコノグラフィとして残されている。赤・黒を主として白・緑と素材はすべて大理石。なかには、何世紀かの人の歩みの下に、そのモチーフが薄れて定かでないものもある。現在では大方はモチーフの周囲に杭を打ち、朱色の綱で囲って、その上を歩くことは禁じられている。しかし、かつて、人々はこの上を実際に歩いていたのだ。美しいものを惜しげもなく踏み歩く以上に、この世にこれほどの贅沢があるだろうか。

大体、ヨーロッパの教会には、よく本堂の内部の床下が司教や大司教の墓所となっており、かつてはその生前の立派な容姿が彫り上げてあったらしい棺の蓋の部分（スラブ）が、すり減って、鼻のめり込んでいる像などに会おうた（た）びに、私などはアッと息を吞んで迂廻してしまふのだが、

習慣と言うのか、死者に対する感覚の違いに驚かされたものだ。死は天国への凱旋だから、地上に残された似姿には未練はないのかも知れない。

しかし、このシエナの大聖堂の堂内ベーヴメントは、実に見事な芸術である。なかでも、キリストの誕生を怖れて、乳幼児をみな殺しにした、いわゆる聖無辜嬰兒の殺害の図は、人間の野蛮と悲嘆と不条理とをモザイクとは思われないような線の力強さで表した、この種のものの逸品であり、その迫力はまさに圧観である。さすがにドゥッチオを代表とするシエナ派の絵画を生んだだけあって、それも豪華絢爛に描かれているのである。

だが、私はふと考えた。

民族の習慣とか、信仰の在り方の違いとかで、このような芸術品を足下に踏み敷いて、この人たちは悦に入っていたのだろうか。いわば、フィレンツェの衛星都市として、財力に恵まれ、かつ聖カタリナのような聖女を出したこの町の人々は、信仰と榮耀榮華の極みとを両立させたかったのであろうか。

私は、宗教的な芸術品とは、やや目を上に仰ぎ見るものだと書いた。それなら、このベーヴメントに対して、

現代人は何かを忘れているのではないだろうか。もし本当に信仰があれば、このベーヴメントを見るものは、かつては直ちに跪いたに違いない。そのとき、このイコノグラフィは、目前に、やや高目にありはしないかと。

これは、奢侈でもなければ、贅の極みでもなくして、人々を謙遜に、身を低くせしめた、一つの示威ではなかったのか。そして現代人が、洋の東西を問わず跪坐することを忘れてしまったのではなからうか。単にその形だけでなく、その心を忘れていないのか。

今の私にはこんな風に思えてならない。もちろん、美しい物、形、似姿は信仰への手引きとなろう。三十三間堂のお観音様の前を往きつ戻りつするなら、その一つ一つのお顔を仰ぎみるなら、さながらお浄土の光を感じ、身の震えを覚えるだろう。やがては自ずと掌を合わせることになるだろう。

忘れてならないのは、見るものをして拝む形をとらせるものが、真の宗教的な美なのではないのか。そのとき、形あるものはその中に形のないものとなって同化されるのである。そのとき人は真の精神の糧を得るのである。

浄土句集

一田牛畝選

夫を待つ膳に一品冷奴
東京 鈴木 葉子

山門に付てば若葉の風通る
東京 新井 新生

大分 丹羽 難中

祖師住みしこ新緑の玄中寺

福岡 荒牧 還愚

行商女飛魚井戸端とときくれし

靈山の清水を引きし手洗鉢
福岡 原 敬二郎

評 浄土宗第二次訪中団員として太原の玄中寺を訪ねられた。この寺は善導大師が二十九歳の時、八十歳の道綽禪師を訪われたのである。新緑のこの霊場に善導大師の跡を尋ねて、恋し懐しの念が溢れしと。

評 玄海灘の飛魚は生々している。井戸端行商女が料っているのは微笑しい。

出水否たしかめ電話安堵せし
福岡 上滝津弥音

汗の手を合せ念仏の死刑囚
福岡 国友 星畝

秩父路や新緑ぐりぐり行く
東京 細田 初枝

関守の番屋といはれ鮎の宿
福岡 高良 慈風

評 作者は福岡刑務所の特に死刑囚の教誨師で、人を殺した珠数の手の合せて念仏している死刑囚の顔は仏顔である。

蛸や三日の旅に里心
群馬 島津 か寿

評 関守の番屋というのは、斎明女帝の九州朝倉の宮の旧跡である。その番屋は筑後川に隣し鮎宿があり、天智天皇の恋物語でも有名だ。

細の凝掛けして蜩蟻の地藏尊
京都 安藤 寛

片蔭のなき真昼道歩を早む
埼玉 佐久間愛子

豆飯を供へて夫の忌を修す
東京 真野よし子

棚経の夫見送りて朝の膳
東京 吉田ゆきゑ

東京 栗原やえ子
伎芸天横顔涼し仰ぎけり

東京 田中 秀代
目をあけて立ちてはまるぶ仔猫かな

東京 阪入志津枝
剪定のつと手に触れし小梅かな

東京 吉原登起子
練切で薄いたたく風炉点前

福岡 高良 幸代
病む眼には手に試し見る梅雲の空

東京 阪入 等達
弥陀堂より礼讀流れ青嵐

東京 末常てる子
朝まだき夏鶯に起されし

神奈川 松本せつよ
山寺の鐘の音淋し梅雨の夕

三重 森 静枝
春めくや真赤に染めし大入日

東京 鳥居 千代
ハツ山の旧街道に風薫る

山梨 青山富貴江
山百合の赤く燃えている山の駅

福岡 永江 隆説
堂くらく袈裟きらきりと法然忌

山形 松田 允子
父の日のつつがなきまま暮れにけり

東京 松溝 敏江
行き交うも若き人々流灯会

福岡 前田 秀峰
どんたくに博多芸者の出揃へる

山形 松田 光誓
梅雨前線それて暑さの戻りけり

滋賀 松尾 郁芳
祖師廟の苔の緑に夏日射す

福岡 新森 耕香
天高く阿蘇の外輪一望に

福岡 服部 光代
手作りの新茶はよけれ子に土産

東京 小笠原香祥
昔日の思ひ出新た桐の花

福岡 行正 明弘
夏法衣袖たくしあげ僧揮毫

東京 猪瀬 幸子
文学の径てふ畦の踊花

東京 栗原とも子
病める娘に一味ちがふ春の粥

一田 牛畝
庭先は東山なる月の宿

法然と道元

— 仏教の根本原理とその庶民化 —

河野の喜雄
(文芸評論家)



一 仏説の根本原理

仏説の根本原理は、一体何であろうか。

人によって、それは幾様にも説かれるであらうが、私はそれを、釈迦自身の、左の様な一偈、十六字に在る、と考える。

世尊、説「無常偈」曰、「諸行無常・是生滅法・生滅々曰・寂滅為楽」。

〔涅槃經〕伝燈録〕

諸行は無常であり、すなわちそれは生滅の法則である。生きる者は必ず死ぬ。然らばその生を、生き抜き、生き通し、生き切つてこそ、始めて成仏して極楽へ行ける——というのが、おそらくはその真意であらう。

そして、この仏説の根本原理を、釈迦がその行為をもつて、無言に説いたのが、いわゆる「拈華」ではないか、と私は考える。

世尊、在「靈山会上」、拈華示衆。是時衆皆寂然。惟迦葉尊者、破顔微笑。世尊曰、「吾有「正法眼藏涅槃妙心、実相無相微妙法門」不立文字、教外別伝。付。嘱摩訶迦葉」。

〔五燈会元〕

その「拈華」というのは、その「拈」が、「指さして物を取る」の義であるから、折から咲き出でたところの蓮華の花を指して折り取らせ、その華を翳して会衆一同に示し、これは何か。この華は一体何を意味するのか。

と、無言裡に問うたのであらう。勿論、誰一人として、この無言の問いに答え得る者はいなかった。

ところが、唯一人、迦葉馬騰尊者だけが、ニコリ笑つて了解を示したところ、釈迦もまたおそらく「破顔微笑」してのことであらう、その「不立文字・教外別伝」であるところの、「正法眼藏涅槃妙心・実相無相微妙法門」の一切を迦葉に付嘱し、迦葉をして、その二世たらしめた、というのである。

それではその時、迦葉は、釈迦の「拈華」を、そもそも如何に理解しつゝ、「破顔微笑」したのであつたらうか。私はそれを、釈迦が、蓮華を翳しつゝ、

この華を見よ。この華は一年にただ一度だけ、性根を尽して、この様に美しく咲き出でた。しかもこの華は、夕にはすでに散り落ちてしまふ。お前たちの一生もまたこの蓮華と同じである。五十年六十年、その一生は長い様に見えても、アッという間に過ぎて、死んで了うのだ。そして、それならばお前たちもまたこの蓮華の花の様に、その生きている間は、出来るだけ美しく、綺麗に、真に生由妻があるように生きよ。

と無言に説いたものと考え。そして迦葉は平生師説に傾聴しつつ、よくこれを理解し、その「不立文字・教外別伝」の哲理を悉皆納得していたので、よくその示唆するところを明察し得て、「破顔微笑」するところが出来たのであろう。

この仏説の根本原理は、釈迦の死後、衆弟・衆僧によって説明敷衍せられたのであるが、それがいわゆる「経」であり、その千・万を数える無数の經典は、却って仏説の真義を、混冥裡に埋没せしめて了ったと言われる。

そしてその經典が、中国において、仏説に帰依したところの高僧たちによって読解せられたとき、その理解如何によって、そこにおのづから、いわゆる「宗派」を生じたのであるが、その最後・最高の宗派が、すなわち「禪宗」であり、禪宗は能く、それまでの千万無数の經典裡に埋没していたところの仏説の真義を、始めて解明した、と言われている。

そして、もしそうだとするならば、禪宗の傑僧たちの言説の中には、上掲、「伝灯録」の偈および「五灯会元」説話における「拈華」に該当するところの、何らかの言葉が、必ずや存在する筈である。

それは、果して存在するであろうか。存在する。それも極めて鮮烈・簡明な端言裡に存在するので。

他でもない。それは道元禪師「正法眼藏山水経」開巻劈頭におけるところの、左の一偈である。

而今の山水は古仏の道現成なり。

道元は、渡支して仏道に専修し、その何代目かの正法を伝受して帰国し、朝廷より

在京を勧められたにも拘わらず、断乎拒否して、越前永平寺に隠棲しつつ、専ら仏説を説いた名僧であり、おそらくわが国における禪僧中屈指第一の人物であろう。

その中国在留の長期に亘った次第もあって、漢字の中国音をそのまま日本語化したところの、一種独特の言説を成しているのだ、聊さか難解な点も存するが、その「而今」は、「現前の」の意であり、「道現成」は、「道をそのまま現示している」と解して、多く誤らぬであらう。すなわち一偈の意味するところは、

私たちの現前の山河草木の姿に、古仏釈迦の説いたところの道が、宛然、現示されている。

そして、もしそうだとするならば、この一偈におけるところの「山水」の語は、直ちにこれを上掲「拈華」の「華」に宛てる事が出来る。

読者もよく御承知のように、私たちが日常、眼にするところの山河草木は、四時それぞれに、最善を尽して、その姿を飾る。

春は花咲き、夏は若葉青葉を茂らせ、秋は黄葉紅葉を飾り、冬は一切を放棄して赤裸となり、専ら地中に摂取しつつ、来春に備えている。そこには疑いもなく、彼ら自身の生を生き抜き、生き通し、生き切っているところの必死の姿が、宛然、「現成」せられていてではないか。

道元は流石に正法伝受の名僧だけあって、能く仏説の真義を理解し、鮮明短直の一偶をもつて、見事にそれを喝破しているのである。

そして、この道元と全く同様に、端言切句を以て、能く仏説の真義を道破しているのが他でもない、わが国における稀有の兵法・兵略家たるところの、かの武田信玄である。

参禅、別に秘法なし、唯、生死の切なるを思ふのみ。

の一偶がそれである。

兵法・兵略というものは、共同社会における人間の相互関係、その人心の機微——の哲理を極めてのみ、始めてこれに達し得るものであり、稀世の兵法家であった信玄

は、その自身の哲学を有っていたらうことは疑いなく、また常に生死の巷に出入していた次第もあつて、かの仏説の、

生滅々曰 寂滅為楽

の一偈の説くところの真義をも、彼はおそらく頓悟したに違いない。

故にこそ彼はよくその端言切句によつて、恰かも仏語自体を日本語に直訳でもしたかのように、

唯、生死の切なるを思ふのみ。

と喝破し得たのである。

道元・信玄兩人ともに、仏説における「生滅滅已・寂滅為楽」という根本原理を悉皆理解、把握し、故に能く釈迦自身と全く同様に、その「不立文字・教外別伝」ところのその真義を、端言切句、日本語を以て道破することを得たものであることは、上述によつて、略々これを明らかにし得た、と思う。

しかしながら、ここに大事な問題がある。道元や信玄は、よく仏説の真義を解して、自身の人生上それを実践し、よくその生を、生き抜き、生き通し、生き切つて、「生滅

々曰・寂滅為楽」した。そして道元は、自身ばかりではなく、数多のその弟子僧たちにも、必死にその道を説いたであらうことも、ほゞ疑いがない。

そしておそらく信玄も、その二十四将位には、それを説いたであらうが、その信玄はもとより、道元でさえも、当代の一般庶民に対しては、仏説を説かなかつた。

「正法眼藏山水経」を始めとする彼の教説は、もちろん一般人にも読まれたであらうけれども、その高踏・難解なところの多分に漢文化された文章は、庶民一般には到底これを理解し能わざるものであり、無縁のものであつた。

しかしながら、釈迦自身が真に志向したところは、衆知のように、「衆生済度」であつた。

居常迷妄しつつ、「酔生夢死」とするところの一般庶民を済度することなしには、釈迦の真意は達せられず、高踏なる仏説の根本原理は、極わめて限られた一部のインテリのみしか通用しないことになる。高僧道元すらも、遂にそれを成し得なかつた。

ところが、唯一人、釈迦の「衆生済度」の真意を理解し、その根本原理たるところの、「生滅々已・寂滅為樂」の大法理を、庶民の誰でもが極めて簡単に実践し得るところの具体的方法を案出し、これを一般大衆に教説しつつ、「衆生済度」を完全に実践したところの、稀世の名僧がいた。他でもない、源空・法然上人である。

二 法然の略歴・その開宗

先づ、法然その人について、一応語っておくことが必要であろう。

法然は、幼名勢至丸、長承二年（一一三三）四月、現在の岡山県久米南町である久米南稻岡荘で、久米郡押領使、漆間時國の長男として生れた。

ところが勢至丸八歳の時、父時國が戦死した。美作国の領主、源内武者定明との権力的内紛によっての、不慮の死であった。勢至丸は母の秦氏と二人だけになったのである。

しかし、時國は当時押領使としては、大分インテリであつたらしく、また、よくそ

の子の秀抜なる天資を看取してのことであらう、左の様に遺言した。

汝さらに会稽の恥をおもひ、敵人をうらむる事なかれ。これ偏に先世の宿業也。もし遺恨をむすばば、そのあだ世々につきがたかるべし。しかし、はやく俗をのがれ、いへを出て我菩提をとぶらひ、みづからが解脱を求には。（四十八巻伝）巻一）

後年、法然は、「父の遺言忘れがたく」と述懐しているが、この父の遺言の然るべきことを信じ、これに従つて、勢至丸は、現在の奈義町高円にあつて、母の弟の智鏡房が住僧をしていた菩提寺に出家し、住持の親覚に師事した。

ところが、勢至丸の非凡な智能に驚嘆した師の親覚は、その叡山における修学の必要を痛感し、僅々四年後、叡山北谷の持法房源光に師事せしめた。その源光もまた勢至丸の非凡な天才を察してのことであらう、二年後の久安三年（一一四七）彼を東塔の功德院の皇円に師事せしめた。そして、この皇円の許で勢至丸は始めて剃髪・

受戒して、法然坊源空の法名を与えられたのである。

功德院においても、源空の天才はさらに鋭発せられ、これに驚嘆した皇円は、

惠解天然にして秀逸の聞えあり。四時五絃の塵立鏡をかけ、三觀一心の妙理玉をみがく。所立の義勢、殆、師のをしへにこえたり。（中略）学道をつとめ大業をとげて、円宗の棟梁となり給へ。（四十八巻伝）巻三）

とまで、彼を賞讃している。その「円宗」とは他ならぬ「天台宗」であり、その「棟梁」は言うまでもなく「座主」である。皇円が如何に源空を高く評価していたか、言うまでもあるまい。

しかしながら、当代の叡山は、時の権力中樞と密接に結合しつつ、「仏道専修」の方は、全くこれを放置していた、と言つてよい。

そして、叡山のその姿を見限つた源空は、自身の修行に専念すべく、久安六年（一一五〇）黒谷に隠遁して、慈眼坊叡空の門に入った。

黒谷は当時、「二十五三昧」の修行場として知られ、それは源信の頃から始められたもので、二十五人の道俗同行が、毎月十五日に参集、源空の「往生要集」の教説を踏まえて、「不斷念仏」を勤め、「法華經」を勉強したと伝えられる。

そして、源空は、この黒谷における「二十五三昧」の修行を契機として、「往生要集」を知り、その「念仏三昧」の所説に、真に瞠目・開眼せられたのであった。

そして、この時点において源空、(以下、「法然」に代える)は、次のような言出をしているのである。

もしそれ造像起塔をもって本願とせば、貧窮困乏の類は、定んで往生の望を絶たむ。しかも富貴の者は少なく、貧賤の者は甚だ多し。もし智恵高才をもって本願とせば、愚鈍下智の者は、定んで往生の望を絶たむ。しかも智恵の者は少なく、愚痴の者は甚だ多し。もし多聞多見をもって本願とせば、少聞少見の輩は、定んで往生の望を絶たむ。しかも多聞の者は少なく、少聞の者は甚だ多し。もし

持戒持律をもつて本願とせば、破戒無戒の人は、定んで往生の望を絶たむ。しかも持戒の者は少なく、破戒の者は甚だ多し。(「選撰集」)

法然がこの時点において、衆生、即ち他でもない一般庶民の「往生」即「生滅々已・寂滅為楽」を切実に、必死に思念していたことは、万、疑いない。

こうして、寂山所定の十二年間の修行を終えた法然は、保元元年(一一五六)年、下山して、洛西嵯峨の釈迦堂に参籠した後、奈良に赴いた。南都には天台浄土教の系譜とは異なる別派の浄土教信奉者がいたからである。

この南都において、法然はすでに亡くなっていた、前禅林寺権律師永観の、「往生拾因」に接し、次でこれを通して中国僧著導の「観経疏散善義」を知り大いに示唆を受けた。特にその、

一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の遠近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるが故に。(「観経疏」散

善義)

の一文に大いに啓発せられたと言われる。

そして、「往生拾因」は、右の「散善義」の文を引用しつつ、

行について信を立つといふは、しかも行に二種あり。一には正行、二には雑行。正行といふは、専ら往生の経によつて行を行ずるもの、これを正行と名づく。何ものかはや。一心に専ら「観経」「弥陀経」「無量寿経」を誦誦し、一心に専ら思想を注めて、かの国の二報莊嚴を觀察し、憶念、もし礼せば即ち一心に専らかの仏を礼し、もし口誦せば即ち一心に専らかの仏を称し、もし讃嘆供養せば即ち一心に専ら讃嘆供養す。これを名づけて正とす。

そして、これを味読しつつ、口称の念仏すなわち「称念」こそ、「仏願に順ずる行」すなわち、仏説の真義である——と理解・納得したとき、法然は始めてその仏説に頓語したのである。そしてその時のことを、彼は次の様に述べているのである。

昔この典を披閱して、ほぼ素意を識

る。たちどころに余行を^{おぼ}めて、ここに念仏に帰す。

「たちどころに余行を含めて、ここに念仏に帰す」の端文裡に、よくこの時の彼の宗教的確信が読まれるではないか。

そして、このように、専修念仏によつて誰でも往生できる、という宗教的確信に到達したことを、「回心」と言うが、法然がこの「回心」に到達した得たのは、承安五年（一一七五）、四十三歳の時と言われる。

そして、この回心を契機として、彼はその自宗を開宗し、爾後終世、その「称名念仏」の易行仏道を衆生に説教し、よく当代より現世に至るまで、無数の一般庶民を済度、往生せしめていたのであるが、ここで、その「念仏往生」の法理を、聊さか敷衍しておこう。

三 称名の真義

「南無阿弥陀仏」と、ただ仏名を称念しさえすれば、誰でも、如何なる暗愚、凶惡な者であっても往生できる、ということ、は、一体どういふことであらうか。

それを簡単に一口で言うならば、称名している間は、悪い事は出来ない、ということであり、その「悪い事」とは、これも簡単に、「反社会的行為」と言つてよからう。

しかしながら、その称名も、時々した位では、その余のすべての時間には、いくらでも悪い事が出来るわけであるから、その称名は、始終これを唱えていなければならぬ、ということになるわけで、そこに「称名念仏百万遍説」が成立することになる。

そして、一日百万遍の称名をして、聊さかも反社会的行為をしなかつたとするならば、貧者は貧者、鈍者は鈍者、愚者は愚者（愚者も称名によつて、その愚事の回数が少なくなろう）なりに、その生業を保持しつつ、無事にその一生を終える、即ち「往生」することが出来るわけであつて、仏説の真義は、実に茲に存するのであり、その「衆生済度」の仏願を、法然は見事に遂行し得た、と言うことが出来る。

そして、能く仏説の真義を理解しつつも、その「易行成仏」の途を説いて、これを衆生にまで及ぼし得なかつたかの道元は

比して、この点において法然は明らかに一歩を擡んでゐる、ということが出来る。

そして、ここにおいて、私が是非一言触れておきたいことは、「新約聖書」におけるところの、クリストの左の様な一言である。

人のすべての罪と潰れとは赦されん。

されども聖霊を潰すことは赦されじ。誰にても言もて人の子に逆ぶ者は赦されん。されども言もて聖霊に逆ぶ者は、此の世にても、後の世にても赦されじ。（マタイ伝）一二章）

クリスト教に「懺悔」があり、罪を犯しても聖霊に「懺悔」しさえすれば赦される、という鉄則があつた。その「懺悔」の対象であるところの聖霊が否定せられたとするならば、もはや贖罪の途はないことになる。

そして、私は、この聖霊への「懺悔」と「称名百万遍」とは、宗教的に全く同義である、と信ずる。その点、クリストと釈迦とは、まさに匹敵・対等すると思ひが、法然もまた、尤にこの両者に追隨し得るのではなからうか。

◎お詫びと訂正

す。その『浄土』誌が、会員諸兄の暖かいご助力によって、十部、二十部と月々に読者が増えているのは、本当にありがたいことです。

法然上人鑽仰会は月刊機関誌『浄土』をよすがとして、皆様と共に、浄土念仏信仰の輪を固め、またより広く多くの人へ向けて、「南無阿弥陀仏」の高唱念仏を呼びかけようとする、まことにささやかなる会でございます。

しかし今回、八月号「暑中御見舞」欄に、京都市左京区専念寺先住、故俵口隆成上人の御見舞廣告を載せてしまったことは、まことに編集子たる私の大いなる誤まりでした。ここに記して、専念寺様や『浄土』の購読の諸兄に心からお詫び申し上げます。

◆年会費値上げのお願い◆

◎新年会費 二、五〇〇円

〔昭和五十四年四月より実施〕
『浄土』四十五巻・四月号以降

諸物価の高騰と諸般の事情により、しばらく頑張っていました当法然上人鑽仰会の会費を、従来の一年分二、〇〇〇円から、表掲の一年分二、五〇〇円の新会費に値上げさせていただきます。どうぞ会員の皆様の暖かいご配慮とご援助をくれぐれも宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会



念佛ひじり三国志

(全五)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

後鳥羽上皇、この建永元年（一二〇六）血氣さかんな二十七歳であった。

性、剛毅磊落だった、と伝えられている。弓矢を取れば武士をしのぐ腕で、刀剣を愛した。また歌道にかけては端倪すべからざる感覚の保有者でもあった。

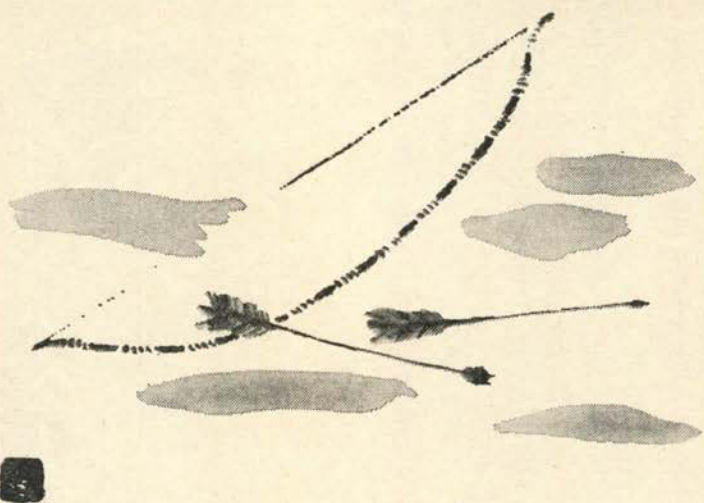
文武両道に秀でた一流のエリート、ということが出来る。

だが、為政者となって複雑な政情を裁断してゆくとき、このエリートはどのように機能するか。ともすると

“トップ独走”におち入りやすい。当然身辺には“庸人”が輩出してくる。

“庸人”——こびへつらうことだけに精一杯な無益の人間を指して言う。無益だけではない。彼らイエスマンが重んぜられたすと有害になる。トップ為政者の暴走に歯止めがからぬからである。

この建永元年、後鳥羽上皇を軸とした院政グループは完全に意志統一がなされていた。鎌倉の武家政権の打倒へひたむきであった。その証固として前年の元久二年には鎌倉幕府調伏のため、白河に最勝四天王院を造立している。日夜、堂僧に武家政権の覆滅を祈らせるのであ



前号のあらすじ

法然上人のもっとも有力な庇護者であった九条兼美は、もとより藤原一族の宗家として君臨していたが、その息良経も太政大臣に登り、また中御門京極に建てた豪邸も、その威勢誇示するものであった。しかも良経は、和歌の道にもたけ、勅撰集「新古今和歌集」の序文を草している程でもある。その藤原家が、現在思いをこらしているのは、「曲水の宴」の復活であった。それは後鳥羽院の勢力を配慮しながら、藤原家の大きな賭でもあった。そして兼美は、この宴をもまた浄土信仰への架け橋にしようと、その構図を浄土曼陀羅に移しかえようとまでしていた。いずれにしても、京都の院の政治、鎌倉の幕府の支配との間の微妙な折衝が、藤原家のみならず、すべての公家たちの生活のありようを支配していた。念仏信仰はその中で、今、深く浸透しつつある。

る。

政略の手を伸ばして、京都市の牧ノ方を通じて北条時政とその子政子・義時の分断をはかったりした。

こうした後鳥羽院政の暴走に貴族たちは批判的だった。ことに兼美は家督をわが子良経にゆずったものの陰に陽に鎌倉と連絡をとって政局の安定に腐心していた。鎌倉で窓口となったのは大江広元あたりだったであろう。

そんな情況下での曲水会であった。

なぜ後鳥羽上皇は、突然この歌宴への臨幸を中止したのであるか。熊野本宮が焼亡したため、と理由づけがなされている。ではその熊野本宮の焼亡とは、何だったのであるか。

これを詮索する前に、われわれは後鳥羽院と熊野との関係を洗いなおしてみる必要がある。

熊野は古来から大和王朝の祖霊地として神秘と尊崇の信仰を集めてきた。いわば神祇における黄泉の国である。皇祖皇宗の霊がこの深山幽谷に眠る、と考えられた。

やがて仏教思想が浸透し、ことに天台真言の山岳密教が定着するに及んで神仏習合が熊野の地で結晶した。峨々たる峯は観音信仰のシムボルと化し、山塊を突き抜けて那智の滝で心眼を潤おせば、その彼方にひろがる南溟の海原こそは補陀洛浄土への道であった。

平安期へはいると歴代の天子上皇は、しきりと熊野詣でをするようになる。貴族顯官もこれに追隨する。「蟻の熊野」と呼ばれるほどの参詣ブームを招いた。

ところで後鳥羽院の熊野詣でだが、その執着ぶりは異常なほどである。生涯で、じつに二十九度だ。第一回が

建久九年（一一九八）十九歳に始まって、隠岐島へ流される承久ノ変直前にあたる四十二歳までだから、二十三年間における数字である。熊野への信仰だけであろうか。

だからと言って熊野の天地に、承久ノ変を支える軍事潜在力があったとも思われない。平家勃興のころには熊野の悪僧もかなりの勢力だったが、その後は衰微している。現に承久ノ変時、京方軍勢にそれらしき者は見あたらない。

では何を目的としたこの瀬繁な熊野詣でだったのであるか。われわれは後鳥羽院の内面においてその理由を探がすしかない。極端に憶断するならば、熊野の幽冥山気が院の剛毅な性格とその裏側で燃えているロマンチズムとびつたりだったことになる。

後鳥羽院は、熊野三山を歩くたびに純血の帝王を自覚できたであろう。靈氣をふくんだ雲の流れに、神の正統な継承者たる自身を強烈に認識し得たであろう。絶対無二の權威を憧憬したにちがいない。

公卿貴族も間違っている。いわんや鎌倉の武家政権なぞこの神国では存在すら許されぬのであった。

藤原定家の「明月記」によると、建仁元年（一一〇一）

十月初旬、定家は後鳥羽院に随行して熊野三山を歩く。記述ですぐ目につくのは旅の難路峻行だ。ひょわい定家はたちまち病んでしまう。ところが後鳥羽院はわが故郷へ戻ったように、すこぶる元気で諸修法を消化し、あまつさえ各社で歌合せを催している。

病ヲ扶ケテ又御所ニ参ズ。数刻、寒風病身、為ス方無シ。深更召シ入レラル。二座ノ和歌。発心門シ料二首。二座ノ事、発心門本宮ニ序アリ。本宮ノ三首、内府ノ序アリ。読ミ上ゲオワリテ退出ス。心中亡キガ如シ。更ニナス方ナシ

熊野本宮に至って、深更に及ぶまで動きまわる後鳥羽院に、病み疲れて追隨できなくなった定家の姿が髭髯としてゐる。

明日は新宮へ出発という前夜も定家は引きずりまわされる。

次デ山伏ヲ御覧ズ。要無キニ依リ委シクハ注セズ。寒風スベ無シ。見オワリテ即チ宿所へ入ル。今夜、

種々ノ御遊アルベシト云々。コノ先達、験クラベノ事ヲ構フト云々。所勞ニ依リ御宿ニ臥ス

定家はついにへたって「種々の御遊び」も見ず、熊野修験者の「験クラベ」も目撃しなかったのである。

弱臣を蔑視しながら、靈山の神事を次々と見すえる後鳥羽院の眼は光り輝く。心気爽快、逞しい肉体はいよいよ発洩となるのである。

いかに熊野の天地が、このやんごとなき身にびったりであったかが推察できるであろう。

ところで「明月記」建仁元年十月二十七日の項は、熊野から帰洛した直後の記述であるが、興味深い文章を書き添えている。

去ル十七日（熊野行幸の留守中）女院御出家ト云々。此ノ御堂ニ於テ此ノ事アリ。法然房參ジテ勸ムト云々。但シ殿下シキリニ難渋シ申サシメ給ヒ、御髪ヲ被（キ）ラズト云々

女院とは宜秋門院のことであろう。殿下は九条兼実で

ある。

剃髪を拒否した兼実が、この三カ月後には法然のもとで出家の素懐を遂げている。

定家は熊野行幸の留守中の出来事として、さりげなく触れているが、やがて同じ留守中の出来事(建永二年)が法然とその門弟の流罪斬刑という大事件に発展するだけに、見逃せない記述ではある。

二

ところで後鳥羽院が熊野行幸が得てくるもの、必ずしもこうした無形の、抽象エネルギーばかりではなかった。後鳥羽院はやがて、熊野の山中で一群の異形者たちに接近する。彼らに魅かれていったのである。

呪術師である。修験者と呼ばれる熊野の山法師たちである。

藤原定家が「明月記」でふれる「験クラベ」——験競らべ、呪術の優劣をきそう妖怪な神事へ後鳥羽院はのめりこんでいったようだ。

おそらく当初は「遊び」として楽しんでいたにちがいない。それが、年を経るごとに熊野の靈氣とともにこの

呪術が後鳥羽院の胸へ喰い入ってくる。修験者は重視されて、後鳥羽院政と密着しはじめるのである。

溯繁におこなわれた熊野詣で、そこから帰洛するたびに重要な政策が決定されるのは、偶然ではない。

土御門帝の讓位(承元四年)源頼家の子僧榮と和田義盛の残堂による六波羅反乱(健保二年)はいずれも熊野参詣の直後だったし、承久ノ変の直前にも後鳥羽院は熊野路を求めた。法然ら専修念仏者の大断崖もまた、熊野から還御の直後に指令されている。

後鳥羽院政にぶ気味な黒い影を投じた側近、熊野呪術者の代表的人物として那智ノ検校が浮かびあがってくる。

那智ノ検校。

長岐という僧名を持つ修験者である。

熊野三山で、どれだけの地位を持っていたのか、全く不明である。前記建仁元年の四回目熊野行幸あたりから後鳥羽院の身辺に登場してくる。多分、旅中の「験競べ」で大いに靈能力を発揮したのであろう。

後鳥羽院はやがて長岐に大僧正を贈位し、那智ノ検校に叙任させる。ただし、これまでに「那智ノ検校」なぞ

という職事はなかったのである。初代検校、つまりは長
岐のために新設したものであった。

長岐はしばしば上洛しては、後鳥羽院の側近へアプロ
ーチする。側近と言っても殆んどが女人だった。修明門
院が病んだと聞けば、その枕頭に侍して千寿法を修し
た。七条院には宇陀郡の莊園を献じたりしている。

曲水会における曲水の川底に那智黒の石を敷きつめ
る。採集の若い力者たちが那智へ向けて出発したのは建
永元年二月二十四日であった。旅程三日で、彼らは那智
の滝へ到達した。

さっそく採集にかかった。

「何をしている」

供の者を左右にしたがえた恰幅豊かな山僧が現れた。

「はい、那智黒の石を」

「こんなものをどこに使うのか」

「曲水の宴において、曲水の川底に敷きつめます」

「曲水の宴じゃと？」

「この桃の節句に九条さま、中御門京極のお邸で催され
るのでございます。宴には院の上皇さまもお出ましにな
られます」

こんな田舎坊主に何がわかるか。九条家の力者たちは
威丈高になって説明する。

「ほほう、九条殿下の供の者か」

「はい」

「して、その曲水の宴になぜ那智の黒石が必要なのかな」
那智ノ検校は根掘り葉掘り執拗に訊きはじめる。若い
力者は知ったかぶりで曲水の宴の由来を物語る。

むかし御堂関白お盛んなころ、大江匡房の建議もあつ
て唐から伝わるこのセレモニイを……と言った具合にで
ある。

「大江と藤原長者のう……すると今度の曲水の宴にも大
江どの、大江広元どのじゃ、彼も関係しているのかな」

重要な設問であることに力者は気づこうともしない。

「はい、深く関係なさっていることでしょう。これまで
も鎌倉から何人ものお使者がやって来られ、工事の指揮
をなさっております」

「鎌倉から何人も、のう。彼らは九条邸に滞留して曲水
宴の準備をしているわけだ」

「そのとおりでございます」

「その鎌倉武士どもが那智の黒石採集を命じたのじゃ

＜熊野神社本宮＞



な

いやに強く念を押してくる。若い力者たちは少し気味悪くなった。

「失礼ですが、貴下はどういう身分のご僧侶でいらっしやいますか」

「なあに名乗るほどの者でもない。この那智の滝で水蛇のように修法している者じゃよ」

言葉を曖昧にして那智ノ検校はその場を離れた。もはや心は京の院の御所へ飛んでいた。即刻この問題は注進申上げなければならない。

那智ノ検校は京への道を急いだ。山で鍛えこんだ修験者の脚は、二日でこの里程を消化してしまった。

深夜であった。検校は某所で某人物と密談している。

その某人物が誰であったは適確に指摘できない。ただし候補者は何人か浮かびあがる。誰ともキメテはない。

しかもこの某人物こそ、続いて発生する殺人事件の真犯人とも言えそうなのである。いや、真犯人の片割れだけははっきりしている。那智ノ検校だ。

直接の下手人かどうかは不明にしても、すくなくとも共同謀議はしている。

検校は語る。

「院は九条家の曲水宴に行幸されるのか」

——その予定になっている。

「それは危ない。院のお命はねらわれている」

——誰に？ 鎌倉の武士か。

「そうだ。中御門京極邸には最近、鎌倉から武士が何人か入りこんでいる」

——まさか。

「いや、わしは那智黒の石を採集にきた九条家の若者から、しかと聞いた」

——誰のさしがねだろう。そんなだいそれた企らみをするのは？

「わからない。しかし九条良経卿が一枚噛んでいることだけは確実だろう」

——太政大臣がだとう？

「うむ、すくなくとも刺客と知っていながら、曲水の宴の庭師として自分の邸に滞留させている」

——なぜ鎌倉は、院を暗殺しなければならぬのか。

「最勝四天王院での秘密修法が鎌倉へ筒抜けなのだ」

——北条調伏の秘修がか。誰がそんなことをしたのだ

ろう。

「専修念仏者だ」

——専修念仏者が、どうして最勝四天王院を知っているのか。

「その念仏者と、院の愛妃と出来ているらしい」

——院の愛妃だとう？ それは誰か？

「そこまではわからない。目下、探索中だ」

——その情報は修明門院どのあたりから出たんだな。

「うふふ……それはともかく九条殿下は法然房に帰依して、専修念仏者になられた。ご自身にそんな意志があるとは思えぬが、念仏者に便宜をはかり、鎌倉の刺客をかくまっておられることは間違いない」

——それは重大なことだ。

「だから、わしは那智から飛んで来たのだ」

——即刻、院の曲水会行幸を阻止しなければならぬ。

「それが先決だ」

——もう日がない。早急に手を打たないと……しかし、どんな理由で九条家へことわたらいいのだろう。

「道中思案してきたのだが、方法は一つしかない。熊野本宮を焼こう」

——熊野本宮を？ 誰が焼くのか。

「それは、わしが引き受ける」

——検校が？

「この際、わしも悪人になる。長年お仕えた本宮を焼くのだからな。もう日がない。おぬしは明日にでも焼亡した、と報告してくれ」

——未だ焼けてもいないのに、か。

「そうだ、報告が二日や三日早くなっても差支えあるまい。曲水会までにあと四日しかないではないか」

——なるほど。火より口が先きになるか

「それについて頼みがある」

——恩賞の件だろう。

「院のお命を救ったのだ。然るべきものを頂きたい」

——莊園か？

「うむ。熊野本宮再興という立派な理由がある。伊勢神宮の御領地を一部、那智へまわしてもらいたい。決して私腹を肥やすわけではないのだ」

——考えておこう。いや、努力してみよう。

二月二十九日の密談はこのあたりで終わっている。那智ノ検校はすぐに熊野へ引き返していった。

翌朝。後鳥羽院から正式の使者が中御門京極邸へ立った。

「一昨々二十八日の払暁、熊野本宮が焼亡しました。かかる不祥事が発生しましたからには、曲水の宴への行幸はお取りやめになりました」

おごそかに伝えたのでった。

三

九条兼実父子は、がっくりとなった。せっかく準備をかさねてきた曲水の宴だ。後鳥羽院の行幸中止とあっては、誰も来てはくれぬであろう。また、臣下の立場から熊野本宮の焼亡には謹慎しなければならなかった。

「またという日もある」

兼実は不機嫌そのものの表情で小松殿へ帰っていった。

殆んど入れ違いのように、那智黒の石を積んだ車を引いて、若い力者たちが帰ってきた。

「殿下、やっと間に合いました」

彼らは疲れきっており、そのまま庭前に坐りこんでしまった。良経は気のない声でねぎらった。

「いやご苦労……せっかくだが、もはやこの石は不要になった」

「何ですって。昼夜兼行で運んできたこの石がですか」

「曲水の宴は中止だ」

「なぜですか」

「熊野の御本宮が焼亡してしまった。曲水の宴どころではない」

「ああ熊野の御本宮が焼けたのですか。それはいつですか」

「一昨々二十八日の払暁ということだ」

「二十八日の朝……それは嘘でございましょう」

「嘘？」

「だって二十八日の夕方、私は御本宮の前を通ったのでございますよ。御本殿もどこも立派に建っていました」

「ほんとうか」

「はい、この眼でしかと見ております。なあ、わしらはお参りもしたよなあ」

同僚に念を押す。

「二十八日は女人詣での日とかで、綺麗な方が沢山、御本殿の前にいましたよ」

同僚も裏付けをする。

「それはおかしい」

良経は考えこんでしまった。

屈強な若侍二名を招いた。これからただちに熊野へ向けて出発せよ、と命じた。本宮焼亡の真相をたしかめさせるためであった。

それにしても後鳥羽院は、なぜ焼亡したなど嘘言を弄して曲水の宴を潰しにかかったのであろうか。良経にはその意図を判じ兼ねるのであった。

九条家の若侍二人が熊野へ出発してすでに四日、桃の節句は昨日終ってしまった。未だ報告はもたらされない。良経としては真相を確認したら、三月十八日あたりにでも曲水の宴をひらきたいと思った。何としても、である。

これは藤原家を謳歌したい意図からではない。いわんや宴上で後鳥羽院を暗殺しようなどと、微塵も考えたことがない。那智ノ橋校は鎌倉の刺客と疑っているが、大江広元が寄越した三人の男は、いずれも老人で、庭園に通曉した職人たちだったのである。もちろん良経は、そんな疑惑の眼を向けられていることすら知らなかった。

その三月四日夜、吉野山の修験小屋で土器の酒を傾けながら前夜と同じ那智ノ検校が某人物と密語をかわしていた。

「いや、とんだことだった」

——熊野本宮は焼いたのだらう。

「それは間違いなく。ただし三月二日の朝だった」

——かまわぬではないか。都から離れた熊野の火事が三日や四日ずれてしまうが。

「そうはいかない」

——なぜ？

「見られた。先月二十八日にはちゃんと本宮があった事実をな」

——誰に見られたのだ。

「良経卿の供の者にだ」

——一番悪い奴に見られたな。

「そのとおり。那智黒の石を採集にきた力者どもが報告してしまったのだ」

——それで？

「良経卿は調査の若侍を熊野へ送りこんできた」

——困ったな。

「困った。ただしその若侍二人は、わしの手の者に殺させた。口は封じてある」

——それならば、もはや心配は不要であろう。

「そうはいかぬ。火の手はいっそう大きくなる」

——と言うと？

「良経卿は必ず検非違使の者をつれて熊野へ乗りこんでくるだらう。自家の侍たちの安否をたずねてな。当然その折に本宮焼亡の事実も明るみへ出る」

——検非違使にまで伝わりと問題だな。あれで院は潔癖だからな。

「そこよ。今度は良経卿だけではない。後鳥羽院まで敵にまわさねばならなくなる」

——院は一本気であらせられる。不正には限らない憎しみをお持ちになる。

「せっかく院のためにしたことだが、この結果はいかにもまずい」

——どうやって解決するつもりだ。

「おぬしは、どう思う？」

——そうよ、のう。

両者は重く黙りこんでしまった。

検校は銚子の酒を土器に注いでやった。某人物も注ぎかえした。

両者は同時にその酒を飲み干した。

次の瞬間、どちらからともなく空になった土器を、ぱつと床に叩きつけていた。どちらの土器もまっ二つに割れた。

「一つしかないな、方法は」

——一つしかない。

「わしが、やろうか。山修験を使おう」

——いや、わしでやれる。

「大丈夫か、おぬしで」

——わしなら見とがめられない。へたに修験なぞしのびこませたら、九条家の者にかめ捕られてしまう。

「おぬしなら、内輪の人間と安心して奥へ通ってぬけるか」

——まさか、と思うじやろう。

「万一のために、邸の周辺にしのびこませておこう」

——頼む。必ず見事にやってみせる

「毒を喰わば皿までもだな」

——良経卿などよりわしには院が恐ろしい。

「わしもだ」

——一決じゃ。これも割ろう。

某人物は銚子を掴むと、かたわらの柱めがけて投げつけた。くだけ散った。

「日は？」

——七日の深更。

「わかった。それまでは別行動にしよう。おぬしが仕損じたら、わしの手の者が必ず乱入する」

——おい、成功したら恩賞は何ぞ？

「こんどはおぬしが請求する番か」

——きまっておる。那智ノ検校のためにやるんだからな。

「おぬしが欲しいのは、女だけだったな」

——那智ノ検校に腕をふるってもらうぞ。

「相当な大人物をねらっているな。修明門院のか」

——いや、ああいう気の強いお方は御免だ。わしはもつとか弱い人がいい。

「坊門局……」

——成就したあとで要求しよう。

暗い修験場の内で、二人は黒い顔で笑った。(つづく)

二 編集後記 二

○猛暑の続いた今年の夏も、九月の声を聞けば涼やかなしのぎやすい時候に変わっている。軒下の風鈴をしまい込んで、ふと秋の夜長を、虫の鳴く音に耳を傾ける。しかし、汗まみれになり慌ただしく過した暑中の疲れが、今になって身と心に重く残っている。名月を観賞する前に、心にぼっかりとかかった何かが、睫毛の上の暈（かき）か、あるいは目の下の隈（くま）のように、うつろな引っかかりを感じさせる。涼風がススキの穂先を撫でさわめき、しいんと澄み切った秋気が快く漂っても、今の私には何か釈然としないのである。——そんな九月を迎えてしまった私である。

鈴虫や早寝の老に飼はれつつ 夜半

○『浄土』誌は念仏信仰に思いを寄せる人たちの暖かい援助とやさしい配慮によって、ささやかにまとめられる小冊子であ

る。諸物価の高騰による出版界の動揺が、いささかともこたえないわけではないが、会員諸兄のいつに変わらぬご理解とご支援が、こうして毎月々々の一冊々々となつて送本できるのである。法然上人の教えの深さを、もとより「ただ一向に念仏すべし」の言葉のうちに受け止めてはいるが、その証しを『浄土』の誌面四十八ページの中に求めるのである。文字通り、手作りの雑誌、心の触れ合いだけを唯一の頼りとした小さな月刊誌。しかしその割には、校正のミスや諸般の事務に誤まりの多いのが気づく。ひとえに私の責任である。読者諸兄に心からお詫びすると同時に、皆様のご寛容にすがりたい。そして願わくば今月もまた、巻頭の法話や特別寄稿、さらにはおなじみの連載も含めて、秋の一夜、静かに目を通していただきたい。

○さて、九月は秋のお彼岸の月。「合掌の心をそのまま生活へ」という評言のごとく、静かな精進の一週間を過したい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十五巻 九月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十四年八月二十五日 印刷
昭和五十四年九月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八―八二一八七番

=新刊=

大正大学教授 竹中信常著

『仏教—心理と儀礼—』

A 5 判 380頁 定価 7,500 円 (送料実費)

◎宗教学界の權威である著者が、最新刊の『仏教—心理と儀礼—』を新たに上梓して、その永年の研究成果を発表されたもの。専門的な詳細な研究書ではあるが、宗教に関心を寄せる多くの人に広く推薦したい。

=好評発売中=

『タ ブ ー の 研 究』

—文部省科学研究費助成出版—

A 5 判 450頁 定価 8,500 円 (送料実費)

『宗 教 学 序 説』

A 5 判 474頁 定価 6,500 円 (送料実費)

=新刊=

花園大学教授 藤吉慈海著

『法然上人御法語講話』上, 下二卷

(上巻) B 6 判 242頁 定価1,300円 (送料実費)

(下巻) B 6 判 278頁 定価1,500円

『阿 弥 陀 經 講 話 附 般若心經の話』

B 6 判 128頁 定価 600 円 (送料実費)

発行 山喜房仏書林

〒 113

東京都文京区本郷 5—28—44

振替 (東京) 0—1900